「命」も「清流」も「五木村」も守れない　川辺川の流水型ダム

命も守れない

ダムの治水効果は限定的。想定外の豪雨には対応しません

2020 年7月の球磨川・川辺川流域での豪雨災害の犠牲者 50 名のほとんどは、本流ではなく、支流の氾濫によって亡くなられています。川辺川ダムがあっても支流の氾濫を防ぐことはできません。

また豪雨災害時の川辺川流域の雨量はそれほどではなく、仮にダムができて効果を発揮しても大きな治水効果は見込めません。ダムが効果を発揮するのは、広い球磨川流域で「川辺川上流に大雨が降った場合」という、極めて限られた状況の場合だけです。溜まった土砂の撤去や堤防強化などダムより早くて安く実現できる対策は多くあり、被災者もダムを望んでいません。

また、ダムに頼った洪水対策では、想定以上の大雨が降った場合、「緊急放流」を行うことになります。大量の水が激しい流れとなり一気に増水することで、ダムに頼った洪水対策しか行われていない下流域では、逃げ遅れや氾濫が発生する可能性が高まり、ダムがあることで逆に非常に危険な状態になります。

被災者と研究者による災害検証。被災者もダムを望んでいない

豪雨災害直後の人吉市街地。ダムで下流域の災害は防げない

清流も守れない

清流は消え、川辺川の水質も生き物も景観も激変します

大きな構造物が川にできれば、自然環境に影響があることは国交省も認めています。流水型（穴あき）ダムであっても水の流れを妨げることに違いはなく、生き物の往来もできなくなり、水質は悪化します。

国は「流水型ダムでもアユなど川のすべての生き物がダムの穴を移動できるように工夫する」としています。しかし、それを裏付ける実際のデータは一切示されておらず、あくまで「シミュレーション」の話に過ぎません。全国の流水型ダムでは、ダム完成後にアユの数が減り、濁りが長期化するようになりました。上流や下流に土砂が堆積して草が生え、生態系も景観も激変しています。国が説明する通り「ダム完成後もアユや生き物の生息状況が変化しない」など、決してあり得ません。

アユやヤマメが減れば、川漁師は生計を立てられなくなり、現在全国から五木村や流域を訪れている釣り客は消え、観光産業や経済にも大きな打撃となります。川辺川は「清流日本一」ではなくなるでしょう。

益田川ダム（島根県）下流側

最上小国川ダム（山形県）上流側の堆砂

完成した他の流水型ダムではわずか数年で上流・下流両方で生態系や景観が悪化。降雨後の濁りが長期化し、アユは激減

五木村にとって、ダムは百害あって一理なし

五木村にとって、川辺川ダムは百害あって一利もありません。ダムのない川辺川こそが、五木村と球磨川流域の人びと、私たち熊本県民の「宝」です。子どもや孫の世代のために、清流とともにある豊かで安心安全な暮らしを守り継いでいきましょう。みなさんやみなさんの両親、祖父母たちがダムに翻弄された歴史を、繰り返すべきではありません。五木村にとって必要なのは、ダムとは切り離した、村民が主役の地域づくりです。

ダムはすぐできる訳ではなく、早くても、2027年度着工、2035年度の完成とされています。ダム建設に関係する村内外の土地所有者から補償同意を得る必要があり、工事着手には相当の時間がかかります。

村の将来を考える時間はまだ十分あります。みなさん、自然豊かな五木村の未来をいっしょに考えましょう。

発行：子守唄の里・五木を育む清流川辺川を守る県民の会
〒860-0073熊本市西区島崎4-5-13　TEL:080-3999-9928 FAX:0968-72-5604
Email: info@kawabegawa.jp　https://kawabegawa.jp

下梶原川

五木村も守れない

ダムの貯水や土砂堆積により、水没予定地は使用不可能に。村づくりにとってマイナスしかありません

川辺川ダム環境アセスでは、ダムができればヴィラ ITSUKI や五木源パークの利用や、ホタルの生息が難しくなると示されています。これに対し国は、ヴィラ ITSUKI は「移転を含め検討」、五木源パークは「貯水後の土砂などを撤去して管理」、ホタルは「生息地を移植」するとしています。しかし、ヴィラの移転先は白紙で、造成場所も完成時期も見通しが立ちません。目の前の美しい川と山が売り物なのに、清流が無くなれば、施設コンセプト見直しの必要性も出てきます。五木源パークには、貯水の度に粒子の細かい土砂や流木が堆積することになります。梅雨や台風時期は利活用の見通しが立たず、イベント会場としても使えなくなります。ホタルの幼虫や川ニナを移植しても、川の環境が激変するためホタル復活は不可能です。さらに清楽椎茸団地、貯木場、鹿解体施設や暫定農地も使用不可能になりますが、アセスでは一切触れられず、国から説明もありません。

ダムができれば、五木村にとって貴重な平地である水没予定地が利用できなくなり、産業振興や移住定住等にも活かせなくなります。

村の観光振興を担うヴィラ ITSUKI

五木源パークは実質利用不可能に

五木村が全国に誇る「清流川辺川」が永遠に失われます

国のシミュレーションでは、川辺川ダムに水を貯めるのは年にわずか1日程度。しかし、ダムによって自然な流れが阻害されてよどみ、貯水期間中に貯まった土砂が排出されないため、ダム水没予定地内には常に土砂が溜まった状態になります。堆積した土砂は大雨の度に巻き上げられ、川辺川・球磨川の濁りが長く続くことになります。土砂が貯まったり濁りが長期化すると、川の生態系や植生も変わり、香りも味も良い大きなアユも捕れず、魚も昆虫も鳥も激減します。

ダムができれば、五木村の最大の魅力である「清流」は永遠に失われ、五木村のブランドイメージも下がることになります。

同じ流水型ダムである立野ダム。「流水型ダムだから清流も生態系にも影響はない」とは到底思えない。川辺川ダム貯水量はこの 13 倍以上。

ダムに振り回された流域の歴史を、ふたたび繰り返してはいけません

これまで球磨川流域はダムに振り回され、下流では荒瀬・市房・瀬戸石とダムが作られる度に水害被害が甚大化し、自然も失われてきました。今回も、役に立たないダムのために、なぜ五木村が苦労しなければならないのでしょうか。一体、誰のため、何のためのダムなのでしょうか。

県が示している村の振興計画は、間接的にダムと関連付けられており、ダム計画のために五木の村づくりや将来が縛られることになります。流域住民間でダム反対・賛成と意見が分かれている現在、ダム問題の長期化は避けられません。五木村の地域振興がダム前提で進むことで、村のみなさんが半世紀以上に渡って苦しめられ、振り回されてきた歴史が、再び次の世代でも繰り返されてしまうことになります。

かつてダムが一度中止された後、頭地大橋や国道、水没予定地利活用などが進み、村づくりは着実に成果を上げてきました。ダムができれば、これまで多くの方々が努力してきた取り組みが水の泡となり、村づくりにとって大きなマイナスです。ダムに振り回されず、五木村民が主人公となった村づくりを進めることが大切です。

豊かな森林や川、自然や文化を活かして、ダムから切り離した村づくりを進めることが重要
（写真は宮園の林間学校での川遊び体験）

このチラシは市民からの寄付とパタゴニア社環境助成金によって制作しました